

## 序

美川圭先生は、二〇二二年三月をもってご定年を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生のこれまでの御功績を称え、そして深い感謝の意を表すため、ここに退職記念の論集を編んで献呈させていただくこととしました。

美川先生は、東京都のご出身で、一九八一年に京都大学文学部史学科国史学専攻をご卒業後、同文学研究科国史学専攻博士課程前期課程に進学され、修了後には同後期課程に進学、一九八八年に指導認定退学され、一九九八年に京都大学より博士（文学）の学位を授与されました。一九八七年四月より冷泉家時雨亭文庫目録調査委員を務められた後、一九九三年に摂南大学国際言語文化学部（二〇〇五年に外国語学部名称変更）の助教授に、二〇〇三年に同教授にられました。そして本学には非常勤講師としてご出講のあと、二〇一二年に文学部日本史研究学域教授として着任されました。

美川先生の専門領域は日本中世史、とくに平安時代中期から鎌倉時代にかけての朝廷、そして貴族から見た政治史です。冷泉家の資料の調査員をされた際に出会われたテーマとのことで、承久の乱以降、朝廷の力が失墜したと思われた時代に、藤原定家が貴族文化を守り抜いたことに注目されたようです。京都ならではのテーマではないでしょうか。ちょうど某放送局では北条泰時を主人公とする大河ドラマが放送中ですが、これは武士側の視点より描いたドラマですから、先生のご提示された「貴族」側からの視点からみればどう評価されるのかをうかがってみたいところです。主要研究業績一覧にありますように、先生のご業績の数はたいへんな数であり、ご単著だけでも六本以上あります。そのうちの一冊、昨年いただいた中公新書『院政 もう一つの天皇制』（増補版）は、緻密な組み立て、重厚な内容、風格のある文章ゆえに、引き込まれるように読ませていただきました。

美川先生の本学でのご在籍はちょうど一〇年ですが、本学でのご功績はとも一〇年とはいえないくらい大きなものです。専攻主任と学域長を本学着任の翌年から二〇一九年までは毎年務めていらっしやいます。ご存知のように専攻主任と学域長には、隔週で開催される主任会議で毎回のようにより専攻へもち帰っていただく課題があり、かなりのご負担を強いています。ただ美川先生は完璧にお役をつとめていらっしやいました。例えば、文学部では毎年二月初旬から中旬にかけて授業のシラバスを執行部で点検し、修正箇所があれば、専攻主任から科目担当者に修正を依頼することになっているのですが、美川先生はインフルエンザにかかったの発熱時も、ご自分で各科目担当者にシラバスの修正依頼をされました。当時、私は日本史学域の科目のシラバス点検を担当していたので、どなたが代わりに動いてくださるのかを心配したのですが、どなたにも依頼されなかったようです。同じ専攻の先生たちは、美川先生だからこそお任せになら

れたものと推察します。一方で、このような責任感の強さ、先生の信念からだと思うのですが、会議で怒っていらつしやることもあり、その厳しいご様子は怖かったという記憶があります。ただ可愛らしい笑顔を見せてくださることもあります。一度奥様との馴れ初めをうかがったことがあるのですが、その時、マスクごしでしたが、先生のニヤツとした表情が見えました。

美川先生には研究科においても大きく貢献いただいています。在籍一〇年の間に博士論文の主旨を五回も担っていらつしやり、後進の育成にも大きな成果をあげていらつしやいます。研究科委員会で先生が複数の博士論文の報告をされているのを記憶しております。先生の熱心なご指導の賜物でしょう。学部生に対しても同様に熱意ある指導をされています。卒業後社会に出てからのことをも念頭に教育をされているとのご抱負をうかがったことがあります。

その先生が二〇二一年一月には大病をされ、春学期には授業をご担当いただけませんでした。コロナ禍で、急なオンライン授業への対応を求められ、皆さんと同様に美川先生もたいへん苦労されたことと思います。幸いにも秋学期には復活され、授業を担当され、大変嬉しく思いましたが、今となってみると、相当のご負担をおかけしたのではないかと思います。

美川先生には、二〇二二年四月からは、特任教授として、引き続き教鞭をとっていただくことになっています。今後とも、立命館大学、文学部・文学研究科へのご鞭撻を賜ることができれば幸いです。

二〇二二年三月一日

立命館大学文学部長

中 川 優 子